

働時間の法規一覧表があり、次に諏訪地方の工場の生活の改善策を示してある。この改善策は項目のみを記す。

一、寄宿舎一棟ノ適當ナル大サ及各棟ニ必要ナル諸設備
及附属室

二、寢室ノ蚊張釣ノ設備

三、結髪室

四、洗面所

五、食卓

六、浴場

七、洗濯所

八、便所ノ構造

これらの項目は図入りで説明が加えられていた。

以上、とりあげた警察署から製糸経営者への要望事項をみると、工場法の施行があつたにもかかわらず、きびしい労働条件が製糸工女をとりまいていたことを物語っている。

(防衛医科大学校公衆衛生学)

水銀中毒の歴史

三 浦 豊 彦

水銀中毒といえば、無機水銀と有機水銀があるが、今回は無機水銀のみにふれる。

古代金属といわれるように無機水銀による中毒は古くから知られていた。ヨーロッパでは水銀鉱山労働者の水銀中毒が一五世紀に発見されているが、わが国の伊勢の射和などの水銀鉱山での中毒の資料はない。

奈良の大仏の造立にあつた水銀アマルガムを用いた塗金では中毒が発生したであろうことが想像されるが、記録は残っていない。大仏の鑄造に二年、塗金に五年をかけたことは塗金が難事業であつたことを示している。杉山二郎は「毒の文化史」のなかで金メッキの技術は中国から導入したもので、水銀の毒性は知っていて、塗金の際には天井をぬいて水銀を充分放散した上で、次の仕事にかかったので、五年もかかったといっている。

この塗金の廃棄物が東大寺の下の白蛇川から佐保川に流れた。これが原因で、天平末期には稻の立枯れが起こったり、異常があいついで起こった形跡があり、やがて平城京から平安京への遷都の引き金になったともいっている。それから一六五五年ばかりたった大正十年（一九二一）に、英国の皇族が来日、記念品に「かぶと」を贈ることになり、鎌倉の某氏別邸の三坪の物置を作業場にして鍍金師 T・M が助手三名と甲兜のメッキをやっている。そして亜急性の水銀中毒にかかった。これを鯉沼荊吾が調査している。使

用水銀の全量は一六〇匁で、これに金粉四六匁を加えている。金一に対して水銀四の割合である。これでアマルガムをつくった。銀の台のかぶとに梅酢をぬって錆をとり、へらで「アマルガム」を塗り、炭火で暖めながら刷毛で摩擦すると水銀がとんで金が残る、これをくりかえした。鍍金師は経験から水銀中毒の危険は知っていて、一日作業するときは数日休業していたが、この作業では製作を急ぐ必要から一日、一〇時間、七日間連続作業を行なった。中心になって仕事をした鍍金師は亜急性水銀中毒にかかり、助手三名は健康を害し、このうち二名は途中で作業を中止して

いるし、鍍金師は作業二日間にはもう口内出血、三日目には眩暈、記憶力減退、下顎リンパ腺腫脹、齒齦から多量の出血、十日間には下顎第三大白歯が脱落している。

第一次大戦中に輸入がとだえたために、温度計や体温計の群小工場が急にわが国でも発達した。大正七年（一九一八）には呉秀三教授が、大正十二年（一九二三）には三浦謹之助教授が、それぞれ、体温計工場と温度計工場の職工の水銀中毒の臨床講義を行なっている。中毒の多発を意味している。

鯉沼荊吾監督官（後名大教授）は当時の零細計器工場の労働者を調査し、高い中毒の発生率を見ているし、汞毒振顫のため爪が切れなくて爪がのびて曲がりくねっていた例があったと語っている。

十五年戦争下でも計器工場、薬品工場で水銀中毒が発生、薬品工場では死亡例もでていいる。

北海道のイトムカ鉞山の水銀採掘が開始されたのは昭和十五年（一九四〇）のことである。間もなくこの鉞山でも水銀中毒があらわれる。

昭和十六年（一九四一）に久保田重孝と大草寛は東京板橋

にあった某科学研究所の木造実験室で水銀電極による電解実験をやっていた化学技術者の水銀中毒を報告している。

一回使用水銀は一〇〇キログラム、あるいは一〇〇〜二〇キログラムで、実験では八〇〜九〇度Cに加熱された水銀を電解槽に充滿した。この実験は昭和十四年(一九三九)九月から昭和十六年(一九四一)はじめまで実施され、全実験を通じて二〇キログラムの水銀が失われた。

わが国では科学者や技術者の水銀中毒の報告がほとんどみられないが、欧米先進国では科学者や技術者の水銀中毒がかなり報告されている。

カイゼル・ウィルヘルム化学研究所の Stock, A は一九二六年に二五年も多量の水銀を取り扱う実験を行なっていて、健康障害のおこったことを報告し、このなかで Faraday や Pascal も水銀中毒になやんでいたこと、Ostwald も原因不明の症状が水銀中毒であったことに気付いたことにふれている。また最近ニュートンの五十歳ころの精神障害は、ニュートンの毛髪分析で、各種金属ことに水銀量が大で、水銀中毒を疑わせるといふ報告がある。錬金術の実験を行なっていたころ水銀中毒にかかったのでは

ないかという。

第二次大戦後も計器工場や電解工場で中毒が発生したが、昭和五十五年(一九八〇)の水銀に関する特殊健診をうけた四、五四六人中、有所見者は五人(〇・一%)となつて

いる。
なおアメリカではごく最近、家庭で金鉱石に水銀を加えて加熱し、家族内に急性中毒の発生した例がいくつか報告されている。

(労働科学研究所)